

文字を正しく整えて書く力を高める授業づくりを目指して  
— 小学校国語(書写)におけるICTの活用場面の工夫を通して —

女川町立女川小学校 金子 宏

## 1 目指す授業像

- (1) ICTの活用場면을工夫することで、児童がそれぞれの学習課題をつかむ授業
- (2) ICTの活用場면을工夫することで、児童が主体的・対話的に課題の解決を図る授業

## 2 研修テーマ・目指す授業像に迫るために

現行の学習指導要領では、書写の指導について、日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力の育成を目指すとしている。毛筆を使用する書写の指導においては、そのねらいを「硬筆による能力の基礎を養う」とし、そして、毛筆という用具の特性を生かすことで、文字を正しく整えて書くことの基礎・基本を身に付けることを求めている。

従来の書写の指導にあっては、文字の組み立て方や点画の書き方、配置の仕方などを紙媒体の手本を提示したり、教師が演示したりしながら、理解させるのが一般的であった。しかしながら、そうした指導では、筆記具の動きそのものを捉えるのが難しく、児童それぞれが課題を設定して技能の習得、向上に取り組むには課題が多かった。

女川町教育委員会は、「女川町教育振興基本計画」において、基本的方向4として「信頼され魅力ある教育環境づくり」を掲げ、その取組として「情報化に対応した教育の充実」を図るとしている。具体的には、情報活用能力の育成を図ること、「分かる授業」の実現を目指すためにICTを活用することを挙げている。このような方針により、本校においては、ICT環境の整備が進み、各教室に電子黒板又はプロジェクターが配置されており、タブレット端末を1人1台用いて学習活動を行える状況にある。

こうした恵まれたICT環境にあって、各教科等の指導実践において、教材の提示や個に応じる学習、協働での意見整理等のICTの活用を試みてきた。国語の学習では、学習課題を明確にするために、場面に応じて挿絵や重要な文を実物投影機で映した。また、算数の図形の面積を求める学習では、図形の面積の求め方を、タブレット端末の意見集約の機能を活用して、学級全体で共有し、集団解決を行った。さらに、体育のマット運動の学習では、児童が運動する様子をタブレット端末のカメラ機能を用いて撮影し、手の着き方や首の曲げ方などを児童に動画再生機能を用いて提示し、児童自身の動きの改善点を気付かせるなどしてきた。そうして、ICTの活用の取組を通して、タブレット端末の優れた機動性や操作性を実感してきた。また、タブレット端末の動画再生機能は動きのある対象を分析的に把握するのに効果があると感じてきた。

そこで、上述した書写の指導上の課題、筆記具の動きそのものを捉えることや、児童それぞれが課題を設定して技能の習得、向上に取り組むことの解決を図るために、ICTの活用が有効であると考えた。タブレット端末の動画再生機能を活用し、文字を書く様子を撮影した動画(以下、手本動画という)を児童に手元で何度も再生させ、それを視聴させることで、筆の上げ下げ、穂先の向き、運筆の速さ・リズムを意識させることができる。また、動画を視聴する際の視点を提示して視聴させることで、児童自身に課題の焦点化を図らせることができる。さらに、タブレット端末のカメラ機能を活用し、児童が相互に書く様子を撮影し、その動画を一緒に視聴し、教え合いや学び合いを行うことで、到達状況を認識させたり改善点に気付かせたりすることができる。と考える。

以上のことから、「学習課題をつかむ場面でのICTの活用」「学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用」「教え合い学び合いの場面でのICTの活用」という3つの手立てを講じ、研修テーマに迫ることにした。

### 3 I期の取組について 【筆順と字形】（東京書籍 新しい書写五）

#### (1) 研修テーマに迫る手立て

前述した3つの手立てのうち、I期では特に、「学習課題をつかむ場面でのICTの活用」「学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用」に重点を置き、研修テーマに迫った。

#### (2) 具体的な手立て

##### ① 学習課題をつかむ場面でのICTの活用

ア 手本動画を電子黒板で再生し、文字の筆順を復習させる。

始筆どうしの接筆は、先に書く画を少し出すのが正しい書き方である。その書き方に従って書くためには、正しい筆順で書く必要がある。まず、児童に「成」と「長」を空書きさせ、その後、手本動画を電子黒板で再生し全体に示し、正しい筆順を復習させる（図1）。

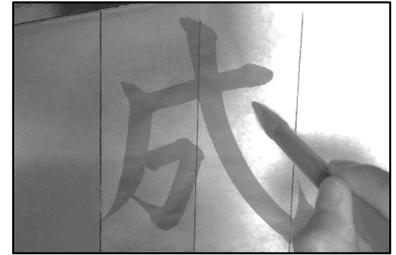


図1 筆順の確認のための手本動画の一部

イ 「成」「長」以外の文字を電子黒板で映し、始筆どうしの接筆の正しい書き方に気付かせ、それを学習課題として設定する。

始筆どうしの接筆では先に書く画を少し出すことに気付かせるために、黒板には「成長」の紙媒体の手本を貼り、電子黒板には「馬」「原」を墨書したものを拡大して映し出す。4つの文字を並べて表示し、それぞれの文字の1画目と2画目がどのように接しているか問うことにより、始筆どうしの接筆の正しい書き方に自ら気付くことができるようにする。

##### ② 学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用

ア 筆順や始筆どうしの接筆の書き方を児童それぞれがタブレット端末で手本動画を視聴しながら、確認できるようにする。手本動画は1画目と2画目だけを書いたものと、「成長」を書いたものの2種類を用意し、児童の練習したい内容に合わせて選択できるようにする。

イ 既習事項の点画の書き方である「はね」「はらい」の練習用紙と手本動画を用意することで、点画の書き方を自主的に練習できるようにする。

「成」「長」にある「はね」の書き方を練習するための練習用紙を用意し、その用紙で練習している手本動画も用意する。「成」「長」にある3つの「はね」は、それぞれはねる方向が違うため、3種類の練習用紙を用意し、必要に応じて児童が用紙を選択して練習できるようにする（図2）。

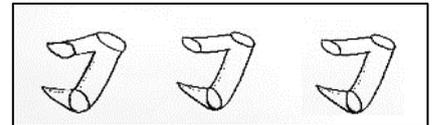


図2 練習用紙のうち一枚

##### ③ 教え合い学び合いの場面でのICTの活用

ア 正しい書き方に従って書いている児童の書く様子を撮影し、電子黒板を用いて全員に示すことで、筆順や始筆どうしの接筆の正しい書き方について再度共有する。

始筆どうしの接筆の正しい書き方を意識して、「成長」を書いている児童の書く様子を教師が撮影し、電子黒板で再生し、児童全員に示す。その動画を視聴し、他の児童に良いところを発表させ板書したことを、その後の練習で児童が意識できるようにする。

#### (3) 成果と課題

##### ① 学習課題をつかむ場面でのICTの活用

○ 「成」と「長」以外の字も示すことで、児童は始筆どうしの接筆の書き方がどの字においても適用される書き方であることに気付いた。

● 「『成』『長』『馬』『原』の1画目と2画目の画の接し方の共通点は何か」という発問に対して、児童は共通点を言語化することができなかった。具体的に画の接し方を問う発問にするか、教師が書き方を解説し、練習時間を確保する手立ても必要であったと考えられる。

##### ② 学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用

○ 児童は手本動画を視聴しながら、練習用紙を活用して、課題解決に取り組んだ。多くの児童が始筆どうしの接筆の書き方や、「とめ」「はね」「はらい」の正しい書き方を意識して、練

習に取り組んでいた。

● 授業後に清書を確認したところ、数名の児童が始筆どうしの接筆の正しい書き方に従って書くことができていなかった。筆順など学習の到達状況を把握し、個別の支援計画を立てる必要があった。

● 点画の書き方を手本動画で視聴する児童がいた一方で、手本動画を視聴しない児童も少なくなかった。手本動画を視聴しない児童の方が、点画の書き方を意識できていない場合が多く、手本動画を活用するように促して練習に取り組ませるなどの手立てが必要であった。

③ 教え合い学び合いの場面でのICTの活用

○ 正しい書き方に従って書いている児童の「成長」を書く様子を映した動画を視聴し、他の児童が良いところを発表することで、その後の練習で意識すべき書き方を確認することができた。

○ 最初に練習した作品と最後に書いた作品が大きく変化した作品を児童に見せ、変化したところを言語化させることにより、次時へ向けた改善点を児童全員と共有することができた。

4 II期の取組について 【点画のつながり】（東京書籍 新しい書写五）

(1) 研修テーマに迫る手立て

I期の取組を継続して行うが、II期では、「教え合い学び合いの場面でのICTの活用」に重点を置いて指導を行った。また、I期で児童の到達状況の確認と支援を十分に行うことができなかった反省から、第1時で児童が互いの書く様子を撮影した動画を、点画のつながりや点画の書き方の評価と第2時以降の児童への支援に活用することをII期の新たな取組とした。

(2) 具体的な手立て

① 学習課題をつかむ場面でのICTの活用

ア 手本動画を電子黒板で再生し、穂先の動きと点画のつながりの書き方に気付かせ、その書き方を学習課題に設定する。

「墨を付け足さずに一文字を書ききること」「次の点画に向かうように筆を送ること」「点画の終わりで筆を立て、そのまま次の点画に移ること」の3点の筆記具の動きを意識することで、点画のつながりが感じられる、整った字を書けるようになると考えられる。点画のつながりの書き方を児童に理解させるために、手本動画を視聴し、その書き方に気付かせたり、教師が解説したりする。

イ 手本動画を電子黒板で示し、新出事項の平仮名の書き方である「結び」に気付かせ、練習に取り組ませる。

「結び」の書き方を練習している動画を児童に視聴させ、「方向を変える際に筆を止める」「筆の軸を回さずに、穂先だけ裏返す」の2点の筆記具の動きに気付かせる。児童が「結び」の書き方を言語化しにくい時は、「方向を変える時にどんなことをしていますか」「穂先の動きはどのようになっていますか」と具体的に問い、言語化するように促す。

② 学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用

ア 「な」を誤って書いている動画を児童全員に視聴させ、点画のつながりの書き方を確認する。確認した書き方を板書し、常に意識して課題解決できるようにする。

あえて誤った書き方で教師が書いている様子を撮影した動画を児童に視聴させ、点画のつながりや「結び」の書き方を確認することで、児童がより一層正しい書き方を意識して練習に取り組むようにする。

イ タブレット端末で手本動画を再生できるようにし、穂先の動きや点画のつながり、結びの書き方を確認させる。

穂先の動きや点画のつながり、「結び」の書き方を全体で確認した後、書き方を板書する。タブレット端末で動画を視聴し、書き方を確認しながら練習に取り組ませる。特に、点画のつながりや「結び」の書き方を意識して書くことができていない児童に対し、動画をタブレット

端末で視聴させ、「結び」の書き方を復習させることで、意識して練習に取り組めるようにする。

ウ 児童の「きずな」を書く様子を児童同士で撮影させて残しておく、教師の指導と評価に活用する(図3)。

児童が「きずな」を書く様子を撮影した動画を授業後に教師が視聴し、それぞれの児童の点画のつながりや「結び」の書き方の到達状況を把握し、次時の個別の支援計画を立てる。



図3 児童が互いに撮影する様子

### ③ 教え合い学び合いの場面でのICTの活用

ア 児童同士で撮影した動画を教師が選択し、電子黒板に映して全体に示すことで、点画のつながりや「結び」の書き方について児童全員で再度共有する。

点画のつながりや「結び」の書き方に従って「きずな」を書くことができている児童の書く様子を撮影した動画を電子黒板で再生し、良いところを児童に言語化させることで、点画のつながりや「結び」の書き方を再度確認させ、児童が意識して課題解決に取り組めるようにする。

イ 児童が互いに「きずな」を書く様子を撮影し、その動画を視聴することで、自分の書き方を振り返らせ、改善点に気付かせる。

自分の書く様子の映像を視聴させ、点画のつながりや「結び」の書き方を言語化して伝え合わせることにより、改善点に気付かせる(図4)。



図4 児童が撮影した動画の一部

### (3) 成果と課題

#### ① 学習課題をつかむ場面でのICTの活用

○ 児童は電子黒板で再生された手本動画を視聴することで、穂先の動きと点画のつながりの書き方を確認することができた。そして、それらを視覚的に理解することで、意識して文字を書くことができた。

○ 「結び」の書き方の手本動画の穂先の動きに合わせて、手を穂先に見立て児童に空書きさせ、穂先の動きを体感させることで「結び」の書き方を具体的に捉えさせ、意識して文字を書かせることができた。

● 児童は穂先の動きや点画のつながりの書き方を感覚的に理解することはできたが、具体的に言語化することが難しかった。教師はつながりの書き方を具体的に言語化するための補助発問を用意する必要があった。

● 「結び」の書き方を確認し、板書をしたものの、練習を行う際にはそれを意識できていない児童もいた。動画で確認させてから、ペアで練習させたり、習熟度別に練習させたりする等の手立てが必要であった。

#### ② 学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用

○ 個別練習の途中で、「結び」を誤った書き方で教師が書いている様子を撮影した動画を視聴させ、児童が正しい書き方と照らし合わせながら感想を伝え合うことで、児童は穂先の動きと点画のつながりの書き方を復習することができた。

○ 評価内容を座席表にあらかじめ記入しておくことで、支援が必要な児童に対して、動画を視聴するよう声掛けをしたり、練習用紙での練習を促したりと、机間指導を効果的に行った。また、誤った筆順で書いていた児童には授業前に正しい筆順を指導した。

● 一問一答の質問に終始してしまい、児童の考えを深めるような発問を行うことができなかった。分かっていることを問うだけではなく、手本動画から書き方に気付かせるような発問や、電子黒板で示された児童の書き方の良いところを考えるような発問をし、児童の深い学びにつなげていく必要があった。

#### ③ 教え合い学び合いの場面でのICTの活用

- 正しい書き方に従って書いている児童の「きずな」を書く様子を視聴し、他の児童が良いところを発表することで、その後の課題解決で意識すべき書き方を確認することができた。
- 児童は、「筆使いが守られていた」という発言をしていたが、「方向を変える際に筆を止めていた」「筆の軸を回さずに、穂先だけ裏返していた」などのように具体的に書き方の良い点について言語化することが難しかった。

## 6 1年間の総括

### (1) 研修の成果

#### ① 学習課題をつかむ場面でのICTの活用について

I期とII期のいずれも、学習課題をつかむ場面で手本動画などを電子黒板で拡大表示して、全体で共有した。全員で課題を焦点化し、学習課題の設定を行うことができたため、この手法は有効であったと考えられる。

#### ② 学習課題の解決に向かう場面でのICTの活用について

児童がタブレット端末で手本動画を視聴し、何度も書き方を参照しながら自身の課題解決のために練習に取り組んだり、自身の書く様子を視聴して改善点を言語化したりと、主体的に課題解決に取り組んでいた。さらには、児童同士が書く様子を撮影した動画を教師の評価に活用し、個別支援を行ったことも、児童の到達状況に合わせた学びを促すことに効果的であった。

#### ③ 教え合い学び合いの場面でのICTの活用について

I期では、教師が児童の書く様子を撮影した動画を電子黒板で拡大表示し、他の児童がよさを見付け言語化することで、学習課題として設定した正しい書き方を再度共有することができた。また、II期では、互いの書く様子を撮影する際に、筆順の間違いや正しい書き方を教えるなど、互いに自然と教え合う姿が見られた。I期において、正しい書き方に従って書いている児童の様子を映した動画を視聴し話し合う経験があったからこそ、場の設定をしなくても自然と児童同士で助言をすることができたと考える。

#### ④ 研修テーマについて

本研修では、児童の文字を正しく整えて書く力を高める授業づくりを目指した。児童の意識調査と完成した作品から、研修テーマに迫ることができたか検証する。

##### ア 書写の授業における児童(32名)の意識調査より

I期の授業を行う前の5月と、II期の授業を終えた後の10月に意識調査を行い、本研修を通しての児童の書写の授業に対する意識の変遷をたどった。結果は以下の表のとおりである。

表1 書写に関する意識調査の結果

単位(名)

質問	とても当てはまる		当てはまる		あまり当てはまらない		まったく当てはまらない	
	I期前	II期後	I期前	II期後	I期前	II期後	I期前	II期後
書写の授業が楽しい。	11	16	16	10	5	6	0	0
毛筆では「とめ」や「はね」などの筆使いを意識して字を書いている。	16	24	14	8	2	0	0	0
書写の授業では、課題を意識して文字を書いている。	10	23	16	8	6	0	0	1
書写の授業で進んで練習している。	11	22	13	7	6	2	2	1
書写の授業で、友達と書いた文字について意見交換することは好きだ。	5	6	9	16	8	10	10	0
書写以外の時間でも、書写で習ったことを意識して文字を書いている。	6	10	14	14	10	6	2	2

I期前とII期後を比較すると、「毛筆では『とめ』や『はね』などの筆使いを意識して字を書いているか」に対して肯定的に答えた児童が100%となっており、更に「とても当てはまる」と回答した児童は25.0%増えている。また、「書写の授業では、課題を意識して文字を書いて

いる」や「書写の授業で進んで練習しているか」の質問に「とても当てはまる」と肯定的に回答した児童の割合がそれぞれ40.8%, 34.4%と増加している。特に、「書写の授業で、友達と書いた文字について意見交換することは好きか」の質問に対し、肯定的に答えた児童の割合が50%以上となった。総じて、どの項目においても肯定的に答えた児童の割合が増加し、児童の文字を正しく整えて書く力が高まっていると認められる。

イ 児童の作品より

Ⅱ期では、毛筆で点画のつながりや「結び」の書き方を学習した後、硬筆で平仮名の俳句を視写させた。授業後、作品は短冊にして廊下の壁面に掲示した。課題を明確にして、常に意識して練習に取り組んだ結果、点画のつながりを表すように書こうとする意識の変化が見られた。毛筆の練習の前に、児童がノートに視写した字と比較したところ、どの児童も俳句の17文字いずれかの文字でつながりを意識して書いていた。図5の左が毛筆を使った学習の前に書いた文字で、右が同じ児童が毛筆の学習の後に書いた文字である。

ウ 実際の日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力

上述した意識調査の結果や児童の作品から、児童の文字を正しく整えて書こうとする意識の高まりは認められる。今後は、書写の時間で文字を正しく整えて書こうとする意識を高めつつ、日常生活や学習活動に生かす指導を継続したい。

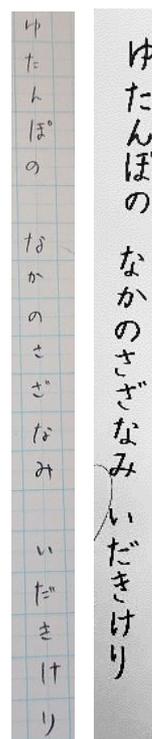


図5 児童の作品の変遷

(2) 今後の課題

穂先の動きや点画のつながり、「結び」の書き方などを学習課題として設定し、課題解決に取り組ませることにより、点画の書き方の技能が向上するものの、全体のバランスが整わなくなってしまうことがあった。向上させた技術を統合して、用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列も含めた整った作品を書く時間を単元の最後に設定する必要がある。

また、研修を通して、手本動画を作成するだけでなく、手本動画を効果的に活用するための補助発問や活動の導入等を模索してきた。練習用紙に練習する様子を撮影した手本動画を用意し、習得させたい点画の書き方を焦点化させたり、手本動画の筆の動きと合わせて、児童の手を穂先に見立てて動かさせることにより、筆の動きを体感的に理解させたりすることができた。このように、手本動画を児童に視聴させるだけではなく、より効果的に活用するために、映像を示す際の補助発問の在り方や、他の教具との組み合わせについても研修していきたい。

そして、Ⅰ期とⅡ期において、書き方を言語化させ、正確に捉える場面を設定したが、授業中は書き方を確認するだけの質問が大半であった。日常生活や学習活動に生かすことのできる書写の能力の育成のためには、児童にとって、ただ教わるだけではなく、「なるほど」というような気付きや発見のある深い学びが必要であろう。これからは、深い学びを生み出すための授業を研修していきたい。

主な参考文献

[1] 文部科学省：「小学校学習指導要領」（平成20年3月）	2008
[2] 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 国語編」（平成20年6月）	2008
[3] 女川町教育委員会：「女川町教育振興基本計画」（平成27年9月）	2015
[4] 文部科学省：「学びのイノベーション事業 実践研究報告書」（平成26年3月）	2014

図表等の許諾について

図1～5は授業の様子を撮影した写真であり、表1は実践前と実践後に行った意識調査の結果を表したものである。いずれも研修の様子や児童の実態を伝えることとして、児童の保護者から報告書での使用許可を得た。